

273 中央大学記事（第二十五回卒業式・卒業生及び優等生）

〔「法学新報」第20卷11（237）号 明治43年12月1日〕

○中央大学記事

○卒業式 第二十五回卒業証書授与式は創立第二十五年記念式と同時に挙行為の爲め延期せられ居りしか工事の都合により記念式は来春に延期せられたるを以て急に記念日に於ける学員会及学生大会と同時に賓客の招待もなく真の内輪のみにて挙行のこととなり去月十一日午後一時より新築大講堂に於て執行したり一同著席音楽隊の国歌を吹奏し了るや学長代理奥田理事は卒業証書及び褒賞を授与し卒業生に対して懇篤なる訓辞あり卒業生総代平松次氏答辞を述へ学員総代会計検査院書記官小栗盛太郎氏の祝詞ありて全く式を終ふ而して奥田理事の訓辞、小栗書記官の祝詞及び平松学生総代の答辞左の如し

奥田理事の訓辞

諸君 本学の卒業証書授与式は七月十日前後に挙行するのが例となつて居るのでありますが諸君の承知せらるる如く本年は六月中旬頃より増築工事に着手しましたので常例の通り七月十日前後に挙行することが出来得なかつたのであります然るに清韓両国の卒業生諸子は帰国を急がる様子でありましたから是れ等諸子の爲めには七月十一日を以て告別会を日本倶楽部に於て開き續て卒業証書をも既に授与し終りましたのであります而し

て本日は本学創立第二十五年記念式と併せて第二十五回卒業証書授与式を挙行するの予定であつたのでありますけれども不幸にも増築工事に著手已来雨天引続き工事の進行捗取らず而も天明年度已来未曾有と称する大洪水さへありて工事に従事中の多くの職人中には自宅の水害に罹りたる者も少なからざりしより洪水の前後十数日間は職人の過半を欠きたる状態なりし上其後に在りても尚ほ兎角雨天勝にて工事を進行せしむるに由なくして九月十一日を以て開始すへき授業さへ十日間も延期し漸くに二十一日より開始したるものの教室の大部分は尚ほ未だ今日に至るも使用すること能はずして僅に数教室を繰合せ辛うじて授業しつつある様な始末でありますから逆も創立第二十五年の記念式を挙行する所の段でないので該式は止むことを得ず来春に延期することになりましたのであります、さればと云ふて卒業証書授与式をも来年に延す訳には参りませぬからまだ完備せざる此大講堂にて右授与式だけは本日簡略に挙行することにしたのであります而して不幸が重なれば重なるもので菊池学長は兩三ヶ月已来病氣の爲め転地療養をして居られ此頃は稍々快方の様ではありますなれども未だ全快の場合に立至らざるより今日も此席に出て諸君に証書を授与し又告別の辞を述べらるることにも叶はざるは幾重にも遺憾のことであります就ては先輩たる伊藤理事が代理せらるべき筈でありますけれども氏も此夏中永く咽喉をわずらはれて今は快方で日日出席もせられ現に今日も出席はして居られますが大勢の前で音声を発表せらるるのは尚ほ困難を感じせらるる様子でありますから如何にも潜越(僭)ながら不

肖の私が代理をすることになつたのであります
諸君は本学に入られてより三年の課程を履みて試業を完うし茲に卒業証書を受くるに至られたのは即ち諸君精励の結果であつて諸君自身は勿論私共に於ても誠に喜ぶ所であります今や諸君は本学を去て社会各方面に向て活動せらるる境遇となられましたに付ては私は二三希望する所を述へて告別の辞に代へたいと考へます私の希望する所とて固より普通のことにして又平凡のことに過ぎぬのではありますけれども尚ほ能く心に銘して忘れない様にして貰ひたいと云ふ老婆心に基づきて此機会に於て重ねて希望して置くまでのことであつて何も新規の事を希望する訳ではありません而して其一は今後諸君が社会の各方面に活動せらるるに当りては其従事せらるる所の事業の何にたるに拘はらず一たび従事したる已上は精力と熱誠とを以て当らるる様心掛けて貰ひたいと云ふことであります凡そ世の中の事は自分独り孤立して為し得らるるものでない既に孤立して為し得らぬ已上は是非其他人を相手にせずではならぬ他人を相手にする已上は其信用を得るのが最も大切であつて而も信用が欠けては何事と雖も為し遂げらるるものでないのは云ふまでもないこととであります而して信用を得るの基礎は学識手腕の如何よりも精力と熱誠とに在ることは諸君が先輩の事跡に就て見られても亦社会の實際に就て見られても疑ひのないことであつて如何に学識が深くても又如何に手腕があつても精力と熱誠とに欠けて居る者は一時は兎も角も永く人の信用を維持することは決して出来得らるるものでないと信じます世の所謂才子が身を誤まり

易いのは即ち茲に原因するのであらうと考へるのであります
 数々例を挙ぐるにも及ばぬ諸君が幼年の頃より聞き及びて居ら
 るる日蓮の事跡を見られよ房州一漁夫の子より身を起し日蓮宗
 派を創始し数百年の後世なる今日に尚ほ数百万の信徒を有する
 に至りたるは固より彼れの学識彼れの手腕とつて力あるは疑ひ
 のないことながら彼れが終始水火の難を厭はず耐ゆべきは耐へ
 忍ぶべきは忍びて一身を犠牲にして精力と熱誠を以て事に當つ
 た結果に外ならぬ様である私は何も諸君に南無妙法蓮華経を信
 ぜられよと云ふのではない而も彼れの歴史は実に精力と熱誠と
 の権化にして諸君の模範を為すものたるを疑ひませぬ徳川家康
 が幕府の基礎を江戸に定め能く天下を統一して子孫能く三百年
 の久しき其勢力を維持し得たる事跡を見れば必ずしも家康の智
 慧計りの結果ではない彼れの精力と熱誠とが能く天下の人心を
 して信用を置かしむることを得た結果の様に考へらる又近く維
 新後に在りても西郷南洲翁は何故に天下の人望を一身に繋ぐこ
 とが出来得たか恐らくは翁の智慧が然らしめたのでなく翁の手
 腕が然らしめたのではない全く翁の精力と熱誠とが然らしめた
 様に考へらるるのであります世の中のは総じて斯様なものであ
 つて精力と熱誠とを以て事に当らばたとひ学識や手腕に欠
 ぐる所があつても遅蒔きながらも事を遂ぐる事が出来る況
 して之れに学識と手腕とが加はつて居れば思ふこととして遂ぐ
 られざるはない筈で精神一到何事か成らざむとは即ち之れを云
 ふことと心得て置くべきであると信するのであります第二に私
 が希望する所は諸君が社会各方面に活動せらるるに当りては紀

律正しく身を持たなくてはならぬと云ふことであります世の中
 が単純であつた時代なれば脳裏を苦めることも少ないから不紀
 律に身を持しても格別に健康に支えることもなくして事に當つて
 参ることも出来得らるのでありますけれども今日の如く生存
 競争の状態が日に月に激甚となつて総ての事物が複雑に涉つて
 参りましたは終始脳裏を活動せしめて居らずではならぬのであ
 ります然るに他面では不紀律に身を持って居りては如何に生来健
 全の者であつても永く事に堪へて社会に活動して往くことは到
 底出来得らるるものでない通俗には昔の人は丈夫なと云ひます
 けれども其れは其筈であつて今の人の如く脳裏を活動せしむる
 ことが少なかつたから大酒を飲むでも夜深しをしても格別の支
 りなくして身体を維持する(マキ)が出来得たのでありまじやう二十
 世紀已後には迎も斯様なことは許しませぬ先輩の事例を挙げれ
 は幾らでもあることなれども余りよいことではないから人を指
 名して茲に例を示すことは致しませぬが併し身を不紀律に持し
 た結果前途有望の人物が中道にして斃れて居ることは夥多あつ
 て後進の殷鑑となつて居りますから諸君は能く心に銘じて忘れ
 ぬ様にして居つて貰ひたいのであります第三に私が希望する所
 は諸君が社会の各方面に活動せらるるに当りては最も一身一家
 の経済に注意しなくてはならぬと云ふことであります近頃は武
 士道論が盛であつて昔時の武士の志操を頻りに称讚して今日に
 在りても人は斯くありたいと云ふの希望が教育界などには最も
 引立て居る様であります固より結構なことではありますけれども
 も昔時の武士は祿で衣食して居つたものでありますから武士道

を専門とすることも出来たのでありまじやうが今日では自ら働いて生活せずにはならぬので昔時の武士の様に黙つて居つて衣食を与へて呉れるものはありませぬ殊に近時は生存競争の状態愈激烈となつて参りましたから別して衣食住のことが追次困難に向ひつつあります衣食住が足らずでは独り社会に立ちて活動が出来得られぬ計りはでない進むで人の品位を維持することが出来ぬことになつて参るのは当然の結果であつて昔時の如く武士

は食はねど高楊子と云ふ様な原則は到底今の社会には適用が出来ぬのであります於乎一身一家の經濟に注意して其基礎を立つることが最も大切であることと考へます世の中が腐敗し人が品位を墜落せしむるのは全く此基礎がないからである衣食足て礼節を知ると云ふ聖人の言は我我を欺かぬのであります霄越し(音)の金は使はぬと意張つた江戸子の格言は二十世紀の今日に於ては人を誤まらしむる格言であることに注意しなくてはなりませんぬ分に過ぎた贅沢をしたり一方には義理呼りをして他方には不義理をする様な始末では逆も一身一家を齊へることは出来たものではないのであります第四に私が希望する所は諸君は其修養したる学識を益研きて社会の進歩に後れない様に注意しなくてはならぬと云ふことであります諸君は一通り専門の学識は得られたものの学問の研究は日に月に進みつつあるのでありますから諸君が今後研究を怠られたときは其学識は後れて社会の實際に用を為さぬことになつて来るのは必然の勢であります二十世紀已後の社会はたとへ衣食住が充分であつても学識が之れに伴ふて居らずでは独り社会に頭角を顯はすことの出来ぬ計りでは

ない社会の實際に活動して行くことが出来得られぬことと考へます諸君は其従事せらるる仕事の傍らには矢張り学校に在つた時と同様学問の研究を続けていつて社会の進歩に後れぬ様に心掛けて置かれずではならぬことと信じます如何にも平凡のことながら私は特に右の四点を諸君に注意して以て告別の辞に代ゆるのは一片の老婆心に過ぎませぬ不惡諒承あらむことを希望し併せて諸君の健康を祝します

祝辞

維時明治四十三年十一月十一日日本大学第二十五回卒業証書授与式に際し諸君に対し敢て祝辞を呈するの機会を得たるは余輩の光榮とする所なり

夫れ社稷の大計治平の要義は基礎を共存に置き共存の觀念は条理に根柢を求めざるへからず法学の本領實に茲に存す而かも時運の進歩は駸駸として止まず世態の錯綜は日に月に益益多きを加へんとす此時に当り螢雪数年夙に法学を修め出でて活社会に飛躍せんとする諸君は正に快刀乱麻を断つ概あらすんはあらず諸君の前途や又多望なりと謂ふへし然りと雖も諸君の行程は遼遠にして際涯なく崎嶇峻峭其間幾多の障碍を免れずと雖も努力奮闘克く百難を排して而して事に当らんか其成功期して待つべきのみ近時青年人士の間頻りに就職難の嘆声を発し延て前途の成功を悲觀し往往自棄に陥るの風なしとせず是實に誤れるの甚しきものなり余輩は特に諸君に告げんとす現今社会の实情は毫も学才の供給過多なるを憂へす寧ろ新進有為の士来て新方面の開拓を翹望するや切なり彼の徒に長嘆し長へに悲觀する徒の

如きは適以て一躍堂に上るの痴夢に耽けるにあらざれば怯懦にして堅忍の資質を欠きたる薄志弱行の輩たらずんばあらす今や諸君は校門を出てんとす須く堅実穩健氣骨稜稜浮華を去り虚榮を斥け以て大器の晩成を期せられんことを祈る聊か以て祝辞とす

明治四十三年十一月十一日 中央大学学員総代 小栗盛太郎

答辞

吾中央大学は今日百穀新に熟し黄菊殊に芳はしき佳節に際し生等のために卒業証書授与の盛典を挙行せられ是れ洵に生等か終生の光榮とする所なり

回顧するに生等は本学に学ふこと数年、久しからすとせず其間常に講師諸先生の懇篤なる指導に浴し切実なる愛撫を蒙り以て今日あるを致せり今又学長閣下の最も有益なる訓戒に接し感激措く所を知らず

惟ふに帝国の国運は日に益隆盛の域に進み漸く世界に於ける優勝の地歩を占めんとし世事従て繁きを加へんとす其の国民の努力奮励に俟つ所あるや言を待たざるなり

生等不敏と雖も既に高等の教育を受く爾今以往諸先生平生の教訓を恪守し各自其分に応じ微衷を社会の爲めに致さんことを期す是れ実に生等の抱負なり夫れ然後本学出身の名誉を汚さず譽恩の万一に報ゆるに庶幾からんか聊か数言を陳へて以て答辞と為す

明治四十三年十一月十一日

中央大学第二十五回卒業生総代 平松松次

○卒業生及び優等生 前学年に於ける卒業生及び優等生左の如し

○法律科本科

愛知県平民	平松 松次	鳥取県士族	小谷 三雄
大分県士族	金田 実	清 国	但 燾
埼玉県平民	細谷 明	広島県平民	松本 修一
兵庫県平民	三田由太郎	鳥取県平民	三谷 益雄
福島県士族	佐々木高美	徳島県平民	橘 彌吉
静岡県平民	竹内 忠一	山梨県平民	川合 春充
鳥取県士族	桑田 知政		

○経済科本科

富山県平民	野崎 義枝	福井県士族	山崎 頼介
秋田県士族	渡辺 繁雄	清 国	張 噌
清 国	孫 鐘	清 国	歐陽 敬勲
佐賀県平民	中村 勝一	岩手県平民	島田小二郎
清 国	魏 斯昊		

○法律科専門科

和歌山県士族	山本 保寿	朝 鮮	崔 昌朝
佐賀県平民	高田 豊市	三重県平民	高崎長一郎
大阪府平民	加藤栄次郎	福島県平民	富田 耕
清 国	徐 元誥	福島県平民	大河原昌勝
長野県平民	山崎 元治	山梨県平民	中沢 幸作
新潟県平民	諏訪 貫一	朝 鮮	頼 雨若
清 国	張 福照	清 国	梁 同愷

岡山県平民	高野 孫一	清 国	李 毓棠	清 国	魏 昌清	千葉県平民	石塚常太郎
清 国	童 顕漢	熊本県平民	長光 晚成	清 国	朴 海遠	滋賀県平民	小林 善彌
清 国	方 庚源	清 国	邵 箴	清 国	陳 慶錫	静岡県平民	真島 庫吉
清 国	陳 英	宮城県平民	莊司 庸	清 国	咸 俊瀨	清 国	趙 恒黙
兵庫県平民	有年 準三	清 国	龔 坤義	清 国	欧陽 博	清 国	鄧 承暉
清 国	胡 伝恩	愛知県平民	新美 利久	清 国	金 応予	清 国	高 穰
清 国	敬 心地	清 国	鄭 汝璋	○新聞研究科			
清 国	高 賛鼎	栃木県平民	手塚 騰	京都府平民	井上 勝好	宮城県平民	渡辺 広重
清 国	揚 悌	清 国	聶 慶祺	神奈川県平民	飯田 勇吉	新潟県平民	上村 進
清 国	曾 彦	清 国	万国 慶	静岡県平民	横井横太郎	石川県平民	八木 甚造
清 国	黄 炳道	清 国	繆 鏜	埼玉県平民	中村由次郎		
清 国	李 承漢	清 国	胡 薰	○英語専修科			
清 国	張 毓英	清 国	梁 冠英	岡本卯之助	竹内音次郎		
○経済科専門科							
愛知県平民	大塩 正良	東京府平民	遠藤武次郎	○優等者姓名			
石川県平民	辻本友次郎	福島県平民	大内半右衛門	法律科専門科三年級	山本 保寿	崔 昌朝	高田 豊市
朝 鮮	供 淳五	朝 鮮	鄭 敬潤	優等生	大塩 政良		
静岡県平民	勝又 隆	清 国	万 宗孔	経済科専門科三年級			
清 国	呂 慶錫	静岡県平民	水口 賢次	法律科専門科二年級			
千葉県平民	斉藤 清隆	群馬県平民	吉岡 禎作	給費生	寺島 由松	特待生	陸 鳩彝
清 国	蹇 先驄	清 国	王 文匿	優等生	秋草 愛一		
福岡県平民	島田 長市	愛媛県平民	正岡 経利	経済科専門科二年級			
神奈川県平民	鴨 覚太郎	清 国	姚 素	特待生	石津 專一		
北海道平民	榊原 忠一	清 国	呉 玉成	法律科本科一年級			

特待生 欧陽成 白石栄太郎

優等生 蕭敬

同専門科一年級

特待生 大槻了

経済科本科一年級

優等生 林 霆肅

同専門科一年級

給費生 前田顕一郎

商科本科一年級

優等生 梶尾 円平

大学予科

益谷 幾蔵 佐々 貫之